

卷 頭 言 — 『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧』刊行に寄せて—

二〇〇四年二月『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧』（二七八頁。以下『綜覧』と略す）が、木簡学会と奈良文化財研究所の成果として刊行された。同書は、タイトル通り、全国の出土遺跡と報告書の状況を克明に調査し、網羅したものであり、その成果と労とを称えたい。

同書では、二〇〇二年までに判明した全国の遺跡データを記したとし、なお遺漏などを克服すべく、読者、会員各位への「ご連絡シート」（二五四頁）も付している。このシートでは、遺跡名（調査次数）、都道府県名、木簡の点数、所在地、調査期間、発掘機関、調査担当者、遺跡の時代・年代、遺跡の種類、木簡の情報、関係文献、お問い合わせ先、などの情報を記すことになっている。これらは、むしろ同書の内容になる項目でもある。今後とも会員諸氏のご協力を得たいところである。

こうした全国の情報、出土遺跡数などが奈良県や京都府・大阪府などに大きく偏ることは当然ではあるが、しかし今や、北は北海道から南は沖縄県というように、全国から出土している現状を明瞭に示してくれている。木簡出土も地方の時代が進んでいることを物語っているところがあるとともに、各地の出土木簡情報を結ぶ絆としての意義があるものと考ええる。つまりそうした同書に接した私は、新潟県の頁をめくり、同書と同じ本年二月刊行で、私が主に関係した『新潟県内出土古代文字資料集成』のことが気になって比較してみた。調査期間、発掘機関、調査担当者の三つの項目が欠落していた。調査担当者の欄は当初に県内市町村に配布したアンケートに設けてあったが、編集段階で取りやめたりした。また調査期間や発掘機関は最初から設けていなかった。本『綜覧』に接してよく検討すべきであったという反省が伴う。こんな風に掲載項目をどうすべきか、他によく学んだつもりであったが、至らないことがある。そうした事項への影響が期待できる。

『綜覧』を一見してもはや無視しがたい特色は、中、近世木簡の増大ではなからうか。またこのことは「出土木簡」という守備範囲でよいかというすぐに隣接する問題につながる。やや私事にもわたるが、筆者が昨年調査に関与した新潟県東蒲原郡史編さん室のために行った同郡鹿瀬町にある護徳寺観音堂や同郡三川村の平等寺薬師堂堂内の柱、梁、壁板など至る所に書き散らされた「落書き」の調査であった。書き散らされた中に前者は永禄六年（一五六三）―元亀三年（一五七二）、後者も永禄一〇年（一五六七）―天正六年（一五七八）の年次記載がありよく知られていたもので、一部はすでに『新潟県史』資料編二四に掲載されており、また同書通史編二中世の「落書きの世界」にも紹介されているので、今回は赤外線撮影による再調査とも言うべきものであった。期せずして中世の村のお堂が文書収蔵庫であった意義等を論じた研究書も現れている。地方の木簡類では、そうしたものが出土木簡の増加とともに、また膨大な文書、典籍類と共に存在し、内容解明や保存などで研究の手を待っている。国内地方のそうした状況に『綜覧』は、思いを致させる。

日本史研究者でも今では海外に出かけることが少なくない。直接関係する中国や韓国などはもとより、いろいろな必要から思いがけない所にも赴く場合もある。古代ローマの木簡では、辺境ブリタニアのビンドランダ遺跡出土の様子を本誌で田中琢さんがご紹介されていた（本誌第七号）。この適切な紹介に導かれて筆者は現場を訪れた時の感激を忘れられない。爾来、海外の博物館ではやはりそうした展示に眼がいく。本年九月にオランダのライデン市にある国立古代歴史博物館で古代エジプト展示のパピルスと並んだ「Writing tablet」に出会った。寡聞にして知らず驚いただけに終わった。本会は、そうした世界の各地域での木簡にも目配りを怠っていないので、さらなる『綜覧』がそうした蒙も開いてくれることを今後も期待したい。

さて本年の研究集会では、中国の飛躍著しい簡牘研究の現状を知り共有できるようにと昨年度から計画された。ご報告は斯界第一線で活躍の各位による。大いに期待し、想いを馳せたいと思う。